

特別教育プログラム

死生学・応用倫理教育プログラム

◇教員◇

堀江宗正 鈴木晃仁 井口高志 富澤かな 古荘真敬 乗立雄輝
会田薫子 (以上、死生学・応用倫理センター運営委員)
鴨下顕彦 齋藤幸平 中澤栄輔 芳賀猛 福永真弓 森崎真由美
米村滋人 伊吹友秀 澤井敦 廣田佳典 轟孝夫 早川正祐
北條勝貴 村上靖彦 山田慎也 吉永明弘

「**死生学**」は、死を免れない生命のあり方を見つめ、とりわけ人間の生の意味を問い直す学問です。死、死にゆく過程、死後、死別や悲嘆、自殺、戦争、災害、医療をめぐる経験と、広い対象を範囲とします。臨床系の研究と人文社会系の研究の双方を含む、学際的な分野です。

また、「**応用倫理**」は、生命倫理や環境倫理や技術倫理などに代表されるように、科学の発達とともに社会のなかで発生している具体的な問題を対象とする研究です。哲学的な倫理学説の単なる応用 (applied ethics) にとどまらず、現場の実践の中で生じる葛藤や困難な判断を分析し、指針の形成に参入する実践的な倫理 (practical ethics) として展開されています。

科学と技術は、医療、情報通信、エネルギー開発などの領域で、私たちの生活を大きく変えてきました。その一方で、生命操作、環境破壊、資源の枯渇といった新たな問題も生み出しています。こうした状況のもとで、科学技術は人間にとって何であるのか、どのように用いられるべきなのかが問われています。また、生きることと死ぬことは、人間にとってどのような意味を持つのかも、あらためて問い直されています。これらの問いから、「死生学」と「応用倫理」は展開してきました。いずれもその性格上、哲学、倫理学、宗教学、歴史学に加え、社会学、心理学、教育学、さらに医学、看護学、法学、工学、環境学やサステイナビリティ研究など、幅広い分野に関わります。

こうした死生学と応用倫理の問題関心を、学際的に学ぶ機会として、2011年に発足した人文社会系研究科「死生学・応用倫理センター」は、学部横断型の「死生学・応用倫理教育プログラム」を開設しました。本プログラムは、各学部・部局で個別に開講されている関連授業を体系的に履修できるようにし、修了証の授与を通じて学修の成果を可視化するものです。これにより、死生学と応用倫理に関する学際的な知識と視野を備えた学生の育成を目指します。関心を有する学生の積極的な参加

を歓迎します。

「死生学・応用倫理教育プログラム」は必修科目（概論）、必修選択科目（演習）、選択科目の3種類の授業からなります。必修科目は「死生学概論」「応用倫理概論」の2講義4単位、必修選択科目は「死生学演習」「応用倫理演習」のうちから2単位、選択科目は6単位、計12単位以上の履修により、修了が認定されます。修了者に対しては、東京大学教育運営委員会より修了証を付与します。



【2026年度開講科目】

必修科目

担当教員	科目名	単位数
堀江宗正 他	死生学概論（死生学の射程）	2
鈴木晃仁	応用倫理概論（応用倫理入門）	2

選択必修科目

担当教員	科目名	単位数
鈴木晃仁	死生学演習 I（患者の歴史と倫理 I）	2
富澤かな	死生学演習 II（共存の論理と食・生命）	2
会田薫子	応用倫理演習 I（質的研究法入門）	2
鈴木晃仁	応用倫理演習 II（患者の歴史 II）	2
井口高志	応用倫理演習 III（ケアと生の社会学(1)）	2
富澤かな	応用倫理演習 IV（共有の論理とオリエンタリズム）	2
井口高志	応用倫理演習 V（ケアと生の社会学(2)）	2
堀江宗正	応用倫理演習 VI（環境思想研究）	2

選択科目

担当教員	科目名	単位数
会田薫子	死生学特殊講義Ⅰ（臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅺ）	2
会田薫子	死生学特殊講義Ⅱ（臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅻ）	2
会田薫子	死生学特殊講義Ⅲ（臨床死生学特論）	2
早川正祐	死生学特殊講義Ⅳ（受容性から考える倫理的な生の諸相：ケアの倫理を起点として）	2
乗立雄輝	死生学特殊講義Ⅴ（死生をめぐる諸問題についての偶然と確率の視点からの考察）	2
古荘真敬	死生学特殊講義Ⅵ（死生をめぐる実存哲学の諸問題）	2
堀江宗正	死生学特殊講義Ⅶ（死生学入門）	2
山田慎也	死生学特殊講義Ⅷ（葬送儀礼の変容と死生観）	2
冨澤かな	死生学特殊講義Ⅸ（インドから考える共存と生命）	2
澤井敦	死生学特殊講義Ⅹ（死と不安の社会学）	2
池田真理	医 家族と健康（家族と健康）	2
中澤栄輔	医 生命・医療倫理Ⅰ	2
鴨下顕彦	農 技術倫理（食・生活・生産を中心に、現代の科学技術と社会との接点において、価値判断を伴う意思決定が求められる場面を取り上げる）	1
芳賀猛	農 生命倫理	1
伊吹友秀	養 応用倫理学概論（科学技術論コース）	2
伊吹友秀	養 応用倫理学概論（グローバル・エシックス）	
米村滋人	法 特別講義 医事法	2
米村滋人	法 医事法演習	2
齋藤幸平	養 現代思想（「正統性の危機」を考える）	2

原典を読む

◇教員◇

柳原孝敦、前田佳一

「原典を読む」は、東京大学の全ての学部の学生を対象に、日頃から関心は持ってはいてもなかなか紐解く機会のない、古今東西の古典や重要文献を講読形式で味読することを目的に開かれています。これを機に、一行一行をじっくり解釈しながら読み解いていく快樂を味わってみてください。

この科目は、もともとは2001年度までの「**外国文学講読**」を発展させたもので、文学部が専門課程における教養教育の一環を積極的に担うこと、具体的には理科系ないし社会科学系の学部¹に在籍する学生諸君に、外国文学の講読を通じて幅広い人間教育を行うことを目的にしていました。もちろん、文学部の学問は、外国文学だけに限られているわけではありません。哲学、思想、歴史、社会学や心理学などの幅広い分野が研究対象です。しかも、そこに共通するのは、それらの学問の基本が広義の文献学、すなわちテキストの解読であることです。そこで、2002年度からこの科目の開設を文学部全体に広げ、名称も「**原典を読む**」に改めることにしました。したがってここに言う「原典」とは**外国語文献**だけでなく、**日本語文献**や時には**翻訳文献**も含まれることとなります。

テキストの解読は決してたやすいことではありません。日本語文献であっても、「日本語なのだから、読めばわかるだろう」式の安易な姿勢で接すると、大きな間違いをしでかします。テキストを解読するには、一定の方法に従いながら、きちんと筋道を立て、その上で内容を解釈していく地道な作業が求められます。そうした作業を実践的に学んでいくことが、ここでの目標となります。慣れないうちは面倒と感じるかもしれませんが、はまり込むとそれが愉悅に変わります。文学部の学問の楽しさはそこにあります。教員との人間的な触れあいが得られるのも、この科目の魅力といえます。担当するのは、すべて文学部の専任教員です。少人数向けというのが原則ですから、ずいぶんと贅沢なことかもしれません。マスプロ授業の経験しかない諸君は、ぜひ一度こうした手作りの授業を味わってみてください。

なお、以上のような趣旨で開設される科目ですので、文学部所属の学生諸君は聴講に制限のある場合があります。詳細は、授業を担当する各教員に確認してください。

参考：2026年度開講科目

- ・ロベルト・ボラーニョ『2666』を読む（柳原孝敦）
- ・ヘルマン・ヘッセを読む（前田佳一）

アカデミック・ライティング

◇教員◇

Catherine Dale、David Taylor、中邑啓子

インターネットの普及等により、学術研究の成果の共有が時空を超えて瞬時にできるような時代が到来しています。学術研究における国際化の流れのなかで、母語が異なる世界中の人々と共通の基盤を持ち、情報を公開し合い、相互理解に基づく批判的な検討や質疑応答が学術研究を進展させる大きな推進力になっています。このような状況の中で、今後学術研究の一端を担おうとするためには、それなりの能力の養成がこれまで以上に必須となります。

2002年度より、学術研究の成果を今や世界の共通語である英語を使って広く国際社会に公開できる能力の養成をめざして、人文社会系研究科・文学部では、学部・大学院共通で半期2単位の「アカデミック・ライティング」という授業が開講されています。受講生のレベルを考慮し、年度を重ねて開講科目が整備され、2005年度からは、学術研究への意欲を持つ学部学生の基礎力養成を目指す「Academic Writing I, II (Introductory)」、大学院・学部共通で、基礎力の向上を目指す「Academic Writing III, IV (Intermediate)」、学術研究の成果が公表できるような能力の発展を目指す大学院専用の「アカデミック・ライティング 1, 2 (上級)」というようにレベル別に授業が開講されています。手紙や伝言等を含む日常生活にかかわる比較的短い文章や調査報告や研究概要等を含む研究レポートの作成が英語で書けるような能力が修得できていないと思われる学生は、まず共通講義の「英語後期 (Writing, Speaking)」を受講して基礎力を十分に養成してください。そのような基礎力の裏付けがあることが、「アカデミック・ライティング [英語]」を受講するための前提条件となっています。

授業は、(1) 学術論文の構成等に関する講義、(2) 受講生による論文の作成および口頭発表、(3) 受講生同士による発表論文についての討議、(4) 教員による批判的講評という形態で進められ、これらはすべて英語で行います。特に(2)については、与えられた課題について小論文を数回作成し、それらについて(3)、(4)の過程で学んだことに基づき、学期末には受講生が専攻する分野での研究の成果を学術論文として作成し、実践的能力の養成に努めます。1クラスの受講者数が20名を超えるとこのような形態の授業は効果的に行うことができないので、受講希望者は、上記の要件を満たしていることを前提として、初回の授業の折に、担当教員が面接等を行って受講者を決定します。受講機会の均等化を図るため、当該年度に受講できるのは原則1クラスのみとします。

なお、大学院のみの科目ですが、フランス語とドイツ語、中国語の授業も開講されています。